

# 漢方医学

## I. プログラムの名称

慶應義塾大学医学部漢方医学センター 後期臨床研修（専修医課程）プログラム

## II. 基本方針

漢方医学は医療のどの分野においても有効な治療手段である。診療に来る患者は幅広く、様々な愁訴で受診するため、確かな診断能力も要求される。更に大学医学部・病院において漢方医学の診療を行う意義は、西洋医学と融合しうる漢方医療のあるべき姿を高度専門医療を行っている他科に示すこと、および医学教育において医学を志す学生／研修医に示すことにある。

本プログラムは高いレベルの漢方診療技術を修得するのみならず、西洋医学との融合した医療を行う医師を養成することを目指している。従って、プログラムでは外来診療で出会う様々な領域での疾患、症候に対して西洋医学的知見と基礎医学的機序まで踏み込んで理解を進めるとともに、漢方医学的診断「証」について学び、最適の漢方治療を選択できるようにする。漢方専門医としては生薬のレベルにまで知識を有し、煎じ薬も処方できるようになることが最終的なゴールとなる。

## III. プログラムの指導者と研修協力施設

### ①プログラム指導者 慶應義塾大学漢方医学センター

センター長	三村 将	教授
研修担当	堀場 裕子	助教
責任指導医	渡辺 賢治	教授
指導医	福澤 素子	講師
指導医	渡辺 賀子	講師

### ②基幹施設：慶應義塾大学医学部漢方医学センター

### ③研修協力施設 東京都：稲城市立病院、練馬総合病院

## IV. 教育課程

プログラムは大きく2つのコースに分かれる。

どちらのコースも、目的は単なる漢方の知識の修得に留まらず、確実な西洋医学的診断能力をも育成するにある。わが国の漢方医学の将来を担う人材として高い診断レベルと問題解決能力、温かみある人間性を備えた総合医であることが要求される。

Bコースの場合でも基本領域の専門性にとらわれない全人的な西洋医学的診断能力のスキルアップとともに最高レベルの漢方医学治療が行える能力を身につけるよう研鑽する。研修終了後は、継続して慶應義塾大学医学部漢方医学センターにおいて診療、研究、教育に従事する。なお、学位取得を希望する者には、基礎・臨床研究を通じて、学位取得の機会が与えられる。



### <漢方研修1年目>

慶應義塾大学医学部漢方医学センターにおいて、主として外来患者から漢方医学の基本と漢方医学的診断能力を身に付ける。全人医療である漢方診療では領域・性別・年齢を問わず幅広く患者が、多彩な愁訴をもって来院するので、西洋医学・漢方医学の両面での的確な診断能力を養う必要がある。日々の臨床経験を疎かにせず、毎日自ら課題をもって学び、疾患についての知識を高める。それとともに外来において指導医のもと一般的な漢方診療技術を習得する。

その他、症例検討会、初診患者診断検討会、古典文献の抄読会、生薬勉強会などで漢方医学基礎理論を理解する。与えられる課題について専修医はポートフォリオにまとめるとともに定期的な発表をすることで、知識の定着およびプレゼン能力を高める。また、積極的に学会報告をすることで、幅広い知識を身につけることが推奨される。

### <専修医2・3年目>

当院あるいは関連施設において、実践的な漢方診療を行いながら、定期的に症例検討会で症例を討論する。

これらの3年間の研修により、日本東洋医学会認定漢方専門医資格の取得条件が満たされる。なお、学位取得を希望する者には、基礎・臨床研究を通じて、学位取得の機会が与えられる。

## VI. 研究活動

症例報告の他、症例集積研究などを積極的に行う。また、漢方薬に関する臨床研究も積極的に行なっている。

基礎研究では漢方薬の薬効機序の研究が主であるが、一例として生薬成分によるオリゴデンドロサイトの増殖・分化の促進作用などの成果が上がっており、脱髄疾患ならびに認知症治療への道筋を研究している。

## VII. 学会、研究会など

専修医は後期研修を開始する時点で日本東洋医学会の会員となり、学会の定める研修内容を踏まえた研修を開始する。また、関連する専門学会にも所属し、各学会、専門誌に研究成果を発表する。後期研修に関わる主な漢方に関する学会は以下の通りであるが、この他基本領域での報告などを積極的に行うことが好ましい。

### 【国内学会】

日本東洋医学会  
和漢医薬学会  
漢方治療研究会  
日本生薬学会  
臨床漢方薬理研究会  
日本小児東洋医学会  
日本東洋心身医学研究会

泌尿器科漢方研究会  
漢方免疫アレルギー研究会  
日本小児漢方懇話会  
産婦人科漢方研究会  
外科漢方研究会  
小児外科漢方研究会  
日本脳神経外科漢方医学会

### 【国際学会】

国際東洋医学会  
国際統合医療研究会

## VIII. 評価方法など

<評価方法> 基幹施設においては教室スタッフ、研修医担当主任などにより逐次評価を受ける。研修協力施設においては、研修担当責任者が逐次評価を行う。

### <プログラム修了の認定>

専修医課程開始後3年を経過した時点で、上記の評価をもとに専修医課程修了の認定を行う。

<プログラム修了後のコース> 慶應義塾大学医学部漢方医学講座のスタッフとして大学または関連施設に所属し、引き続き漢方診療に携ると共に、指導医として後進の育成に努める。

IX. その他 慶應義塾大学医学部漢方医学専修医研修プログラムに関する最新情報は、下記を参照のこと。

慶應義塾大学医学部専修医センター: <http://www.med.keio.ac.jp/sotsugo/kouki/kouki-index.html>

漢方医学センターホームページURL : <http://www.keio-kampo.jp/>

問い合わせ先: 研修担当主任 堀場裕子 [mannta217@z2.keio.jp](mailto:mannta217@z2.keio.jp)

# 医学後期臨床研修評価表

大項目	中項目	小項目	細目	総合評価	主観評価	客観評価	
				A~D	a~d	a~d	
I. 病態からみる漢方	1. 漢方医学の基本理論	A. 陰陽説					
		B. 五行説					
		C. 臓腑説					
		D. 三陰三陽説と経脈学説					
	2. 病態と治療	A. 虚実					
		B. 寒熱					
		C. 表裏(内外)					
		D. 六病位(三陰三陽病)					
		E. 気・血・水					
	3. 診察法・四診	A. 望診一般		1) 舌診			
		B. 聞診					
		C. 問診					
		D. 切診		1) 脈診			
				2) 腹診			
	4. 病態治療一般	A. 合病・併病					
		B. 治療中の病態変化					
		C. 西洋医学との併用					
		D. 養生・食事					
		E. 標治・本治					
		F. 補法・瀉法					
G. 効果判定							
H. 西洋薬との併用							
I. 未病							
II. 方剤からみる漢方 頻用または重要処方について	1. 生薬と方剤	A. 生薬		1) 基原			
				2) 修治			
				3) 品質			
				4) 四気・五味と薬能			
				5) 成分と薬理作用			
		B. 方剤		1) 構成生薬と君・臣・佐使			
				2) 組み合わせの効果			
				3) 加減方と合方			
				4) 服用(投与)方法と注意点			
		C. 剤形		1) 湯液			
				2) 丸剤			
				3) 散剤			
				4) エキス剤			
			5) 外用剤				
	2. 主な方剤群	A. 主な生薬による		1) 桂枝を含む方剤群			
				2) 麻黄を含む方剤群			
				3) 柴胡を含む方剤群			
				4) 黄連を含む方剤群			
				5) 大黄を含む方剤群			
		6) 石膏を含む方剤群					
		7) 人参を含む方剤群					
		8) 地黄を含む方剤群					
		9) 附子を含む方剤群					

大項目	中項目	小項目	細目	総合評価	主観評価	客観評価	
				A～D	a～d	a～d	
Ⅱ. 方剤からみる漢方 頻用または重要処方について	B. 主な作用による		1) 気剤				
			2) 駆瘀血剤				
			3) 利水剤				
			4) 補剤				
			5) 瀉剤				
			6) 滋陰剤				
	3. 安全性・副作用	A. 安全性・副作用一般					
		B. 注意すべき副作用		1) 偽アルドステロン症			
				2) 間質性肺炎			
				3) 湿疹・皮膚炎			
4) 肝機能障害							
C. 西洋薬との相互作用							
D. 瞑眩							
Ⅲ. 症状からみる漢方	1. 頭痛		A. 頭痛				
			B. めまい・耳鳴り				
			C. くしゃみ・鼻汁・鼻閉・後鼻漏				
			D. 口腔内違和感				
	2. 胸部		A. かぜ症候群				
			B. 慢性咳嗽・痰				
			C. 喘鳴・呼吸困難				
			D. 動悸・息切れ				
	3. 腹部		A. 食欲不振・悪心・嘔吐・胸やけ				
			B. 便通異常(便秘・下痢)・腹痛・腹部膨満感				
			C. 排尿異常				
			D. 月経異常				
	4. 四肢・関節・皮膚		A. 浮腫				
			B. 関節痛・神経痛				
			C. 感覚障害・運動不全・不随意運動				
			D. 湿疹・蕁麻疹・皮膚掻痒症				
	5. 全身・精神		A. 疲労・倦怠感				
			B. 虚弱体質・冷え症				
			C. 抑うつ状態・不安・不眠				
			D. 認知症・異常行動				
	6. 検査異常		A. 代謝性疾患				
			B. 腎機能障害				
			C. 肝機能障害				
			D. 貧血・出血傾向				
Ⅳ. 鍼灸	1. 病態把握						
	2. 経絡・経穴						
	3. 適応・禁忌						
	4. 治療	A. 鍼(種類・刺激法)					
		B. 灸(種類・刺激法)					
5. 安全性							
Ⅴ. 西洋医学各専門領域における漢方治療	1. 専門領域(複数記載可)	A.					
		B.					
		C.					
	2. 専門外領域(複数記載可)	A.					
		B.					
		C.					